

## 日本語 OPI テスターを支援するための挑戦

### —ACTFL との新しい関係構築—

ケッチャム 千香子 (2022-2023 会長)

#### 1. はじめに

2022 年はコロナ禍でネット社会が急速に発展した時期でしたが、当研究会会員を取り巻く環境にも大きな変化があった年でした。長年にわたり日本国内での日本語 OPI テスターの育成に携わってきた (株) アルクが ACTFL との業務契約を解消したことで、日本国内で定期的に行われていたテスター資格取得のためのワークショップや、テスター資格更新のための仲介窓口が途絶えてしまうのでは、といった懸念が会員間に生じていた時期でもあったのです。

当時の定例会では ACTFL と資格更新の手続きを直接行う際のメールの送り方について会員同士の情報共有が活発になされていましたが、ACTFL の担当者からの返信が遅く更新手続きが滞っているという相談が後を絶たない状況でした。ACTFL と研究会会員とのコミュニケーションが円滑に進まず、国内での日本語 OPI テスターの増加が期待できない中、運営委員会では、研究会は誰のためにどんな活動をする組織であるべきなのか、その存在意義を問う話合いが続きました。そして、研究会結成当初に掲げられた研究会の活動目標の原点に立ち戻り、「OPI テスターの技術維持・向上、OPI を活用した実践、OPI に関連した研究の紹介を幅広く行うことを目的とした研究会」という活動を継続していくために日本語 OPI テスターの会員が抱える問題から目をそらさず、解決において ACTFL の関連部署の責任者と直接交渉する活動に挑むことになりました。本稿では、この新たな挑戦を中心にご報告します。

#### 2. ACTFL との新たな関係づくり

##### 2.1 ACTFL プロフィシエンシィ・ガイドライン創設 40 周年記念講演」の主催

2022 年 8 月、当研究会は ACTFL の協賛を得て、プロフィシエンシィ・ガイドラインの産みの親でもあるエルヴィラ・スウェンダー氏による講演、および同氏と三浦謙一氏との対談を含む公開ウェビナーを開催しました。ウェビナーには国内をはじめ、欧米やアジア地域から 200 名を超える参加者が集い、ACTFL-OPI の基盤となるプロフィシエンシィについて理解を深めました。当時の ACTFL-OPI の実質的な総括責任者であるマーガレット・マローン氏もビデオメッセージで参加し、日本語 OPI 研究会と

ACTFL との関係がより深まる機会となりました。

## 2.2 ACTFL OPI Assessment Workshop（ワークショップ）の主催

全ての活動が会員からの年会費によって支えられている当研究会のような小さな組織が日本で ACTFL のワークショップを主催するのは、運営面で極めて難しい決断でした。定例研究会では、OPI テスター資格を取得するためのワークショップを研究会が主催する必然性があるのかについて議論が交わされ、持続可能なワークショップの運営に欠かせないボランティアスタッフの負担などが問題視されました。しかし、長い議論の末、最終的に運営委員 4 名が協力することとなり、2023 年夏にワークショップを初めて主催することができました。このワークショップを通して OPI テスター資格を取得した受講生数名は研究会の会員となり運営委員としても活躍しています。

## 3. OPI のブラッシュアップセッション（BS）の強化

会員を対象にしたアンケート調査によると、研究会に参加する最大の目的は BS への参加であり、その理由として、テスター資格更新だけでなく教育現場で役立つスキルが伸ばせるからという回答が寄せられていました。2022 年からは BS の時間を延長し、レベル判定の結果を受けて会員が自らの判定を振り返り再度話し合う時間や、レベル判定時のツールであるレイティンググリッドの勉強会などを加えました。週末の早朝からオンラインで開催する定例会の BS には国外の会員からも音源の提供があり、ネット空間ならではのグローバルな学びの場が味わえるようになりました。

## 4. 2 年間を振り返って

本稿では新たに挑戦した活動に絞ってご報告しましたが、任期中の研究会での活動はホームページの刷新や OPI 関連の研究への助成、研究会が所有する情報管理の強化など多岐にわたります。それぞれに多くの方々の辛抱強い努力と温かい協力がありました。紙幅の都合上、一人ひとりのお名前をあげることができませんが、研究会の活動を縁の下で支え続けてくださった運営委員や、運営委員を励まし支えてくださった会員の皆さま、トレーナーの先生方、ACTFL のスタッフの存在が、現在もなお強く心に残っています。人と人が信頼と尊敬と感謝によって結ばれ繋がっている組織が日本語 OPI 研究会であると思います。そして、運営委員を担当する醍醐味も、この繋がりの輪を実感できることにありました。

会員一人ひとりが作り上げてきた日本語 OPI 研究会が今後も力強く発展していくことを心より願っております。